

## 【研究ノート】

# 1530年代前半下ライン地方宗教改革運動における宣教活動 —福音派聖職者ギスベルト・ファン・ラートハイムを中心に

永本哲也

## はじめに

世界はまもなく終わりを迎え、神の怒りによって残酷に罰される。それを免れることができるのは、新しいエルサレムたる都市ミュンスターだけである。ミュンスターからやって来た使者にそう説かれ、真剣さの違いはあろうがそれを信じた者たちが、下ライン地方からミュンスターへと向かった。しかし、彼らの旅は、ライン川沿いの都市デュッセルドルフで当局に投獄されることで、目的を果たすことなく終わった。その逮捕者の中には、ギスベルト・ファン・ラートハイムという一人の聖職者の姿があった。

本稿の目的は、初期宗教改革運動における草の根の宣教の実態の一端を明らかにすることである。宗教改革は、マルティン・ルターが1517年に『95箇条の提題』を公開したことを皮切りに、神聖ローマ帝国を超えて、ヨーロッパ各地へと急激に広まった宗教運動である。その宣教が成功を取めた原因としては、古くから活版印刷術によって宗教改革思想を伝える著作やパンフレット、ビラが生産され、多くの人々の手に渡ったことが挙げられてきた。しかし、16世紀ヨーロッパの識字率は低く、直接印刷された神学的な著作を読める者は限られていたため、宗教改革の理念が非識字層にまでいかに伝わったかを明らかにすることが、重要な研究課題であると理解されるようになった。その契機となったのが、1980年代にロバート・W・スクリブナーが行った一連の研究であり<sup>1</sup>、その後、図像、劇、歌、各種の行動などさまざまなメディアが、宗教改革期の宣教で果たした役割についての研究が進んできた。現在では、印刷された神学的な著作だけでなく、複数のコミュニケーション手段が相互に影響し合うことで、宗教改革思想が識字層のみならず非識字層にまで浸透していったことは、宗教改革研究者の間で広く認められている<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> R. W. Scribner, *For the Sake of Simple Folk. Popular Propaganda for the German Reformation*, Oxford, 1981; R. W. Scribner, *Flugblatt und Analphabetentum. Wie kam der gemeine Mann zu reformatorischen Ideen?*, in: Hans-Joachim Köhler (Hg.), *Flugschriften als Massenmedium der Reformationszeit. Beiträge zum Tübinger Symposium 1980*, Stuttgart 1981, S. 65-76; R. W. Scribner, *Oral Culture and the Diffusion of Reformation Ideas*, in: idem., *Popular Culture and Popular Movements in Reformation Germany*, London/Ronceverte, 1987, pp. 49-69.

<sup>2</sup> 初期宗教改革期の宣教やそこで用いられたメディアの概要については、以下を参照。永本哲也「宗教改革時代

こうして印刷された著作のみならず、多様なメディアによる宣教を扱った研究が登場したが、未だに実証研究が十分進んでいないのは、口頭でのコミュニケーションを通じた草の根の宣教についてである。既に1980年代にスクリプナーが、宗教改革の理念が広がる際に、通りや家庭や酒場で行われた説教や議論、神学的著作の読み上げ、そこで流布されるうわさなどの口頭でのコミュニケーションが大きな役割を果たしたことを指摘した<sup>3</sup>。しかし、スクリプナー自身、ドイツ各地の散発的な少数の事例を挙げているだけであり、その重要性を示唆するだけにとどまっている。管見の限り、その後この問題についての実証研究が蓄積されているようには思われない。日常で行われる口頭での宣教は、文字による記録として残されることはほとんどないため、史料に基づいて詳細を明らかにするのが非常に難しいためだと思われる。しかし、文字を読めない者が大半を占める初期宗教改革の時期に、その理念が広い地理的範囲、幅広い社会的な立場の人びとに受け入れられた理由を考えるためには、口頭でのコミュニケーションによる宣教に関する実証研究を積み重ねていくことは不可欠である。

本稿では、史料的困難を乗り越え、口頭で行われた草の根の宣教を分析するために、宗教改革支持を理由に逮捕された者の審問記録を利用する。ローマ・カトリック教会が支配的な地域では、宗教改革の支持者に対する取り締まりが行われ、場合によっては逮捕されることがあった。その際作成される審問記録では、逮捕された者の生まれや経歴、他の宗教改革支持者に関する情報、彼らが行った宣教の方法や場所、内容などが自白によって明らかにされている場合がある。これにより、史料に残りにくい草の根の宣教の実態の一端を明らかにしようと試みる。

その際、本稿では、1530年代前半の下ライン地方の福音派ギスベルト・ファン・ラートハイム Gisbert van Ratheimに注目する<sup>4</sup>。ギスベルトは、ドイツ北西部に位置するユーリヒ公領の村ヘーレンゲンの助任司祭だったが、福音主義を支持するようになると、その地位を捨て元修道女と結婚した。彼は、ラートハイムという村で妻子とともに暮らしていたが、1534年2月に周辺の他の福音派とともにドイツ北西部ヴァストファーレン地方の都市ミュンスターに向かい、道中でユーリヒ公の官吏によって逮捕された。この時の逮捕者の中で最も詳細な審問記録を作成されたのがギスベル

---

の印刷物を分析するための視角—カールシュタット「天国と地獄の馬車」(1519年)を中心にして』『ドイツ学研究』79、2021年3月、89-157頁。

<sup>3</sup> 註1の文献を参照。

<sup>4</sup> ギスベルトについては、以下を参照。K. Rembert, *Die Wiedertäufer im Herzogtum Jülich*, Berlin, 1899, S. 339-342; Jos. Habets, *De Wederdoopers te Maastricht. Tijdens de Regeering van Keizer Karel V, gevolgd door aantekeningen over de opkomst der hervorming te Susteren en omstreken*, Roermond, 1877, pp. 214-216; Willem Bax, *Het protestantisme in het bisdom Luik en vooral te Maastricht 1505-1557*, s'Gravenhage, 1937, pp. 52-57; Niepoth, Wilhelm. "Ratheim, Gisbert von (16th century)." *Global Anabaptist Mennonite Encyclopedia Online*. 1959. Web. 2 Dec 2022. [https://gameo.org/index.php?title=Ratheim,\\_Gisbert\\_von\\_\(16th\\_century\)&oldid=146093](https://gameo.org/index.php?title=Ratheim,_Gisbert_von_(16th_century)&oldid=146093) (以下「Niepoth」) 史料に出てくる際には、Gyssbert van Breidberen、Gyss von Rothem、her Gyssなど複数の呼称が使われている。この時代では、ギスベルトに限らず、綴りや呼び方は一つに決まっていない。

トであったため、本稿ではこれを主な史料として用いることで、彼を中心とした福音派の草の根宣教を明らかにしようと試みる。

彼の審問記録はいずれも刊行されている。オットー・レートリッヒ編纂の史料集には、1534年3月4日、日付不明（おそらく3月）に行われたギスベルト単独の審問記録が二つ収められている<sup>5</sup>。本稿では、前者を「証言1」、後者を「証言2」で示す。さらに、コルネリウスの手による再洗礼派の証言記録を集めた史料集には、1534年2月にミュンスターへ向かった者たちの審問記録が収録されている。この中のギスベルトに関する部分を、「証言3」とする<sup>6</sup>。さらに、1533年にユーリヒ公領で実施された教会巡察の記録や彼と関係する説教師などの審問記録にもギスベルトについての証言が出てくる場合があるので、これも補足的に利用する<sup>7</sup>。

聖職者ギスベルトの審問記録を主な史料として、本稿では、以下の四点に着目し、下ライン地方での宣教について分析を行う。一点目は、宣教者である。つまり、ギスベルトに対し宣教を行った、またギスベルトが宣教したのはどのような人物かである。二点目は、宣教方法である。つまり、どのようなメディアを利用して宣教が行われたかを明らかにする。三点目は、人間関係である。宣教の際に、家族や親族、同職、同郷など既存の人間関係がどのように利用され、どのような効果を上げたかである。四つ目は、コミュニケーションの地理的範囲である。スクリプナーは、地理的範囲毎の宗教改革思想の広がり方の違いに注目することの重要性を指摘し、1520年代のドイツでは、「ローカルレベル」「地域レベル」「超地域レベル」に区分できるとしている<sup>8</sup>。そのため、本稿でも彼の区分を考慮に入れて宣教分析を行う。ギスベルトを基準に考えるならば、ローカルレベルは彼が司牧していたヘンゲンやラートハイム、地域レベルは下ライン地方と隣接する低地地方南東部、超地域レベルは低地地方やヴェストファーレン地方、特にミュンスターということになる。

実際の分析に入る前に、本論で使用する用語について説明する。本稿では、カトリックを批判し宗教改革を支持する者を「福音派」、彼らの信仰を「福音主義」と呼ぶ。宗教改革内部で信仰の違いがあったことは当時も意識されており、ルター派Lutheraner、ツヴィングリ派Zwinglianer、象徴主義的聖餐論者Sakramentariier、再洗礼派Wiedertäuferなどの集団を表す用語も使われていた。しかし、1530年代前半の下ライン地方では、宗教改革支持者は少数派であり、確固とした集団を形成しておらず、その信仰も多様であった。そのため、宗教改革支持者が共通して信仰の基盤としていた、福音、つまり純粋な神の言葉に立ち戻ろうとする信仰上の立場を表す「福音主義」、それを支持する人を指す「福音派」という表現を本稿では用いる。

<sup>5</sup> Otto R. Redlich, *Jülich-Bergische Kirchenpolitik am Ausgange des Mittelalters und in der Reformationszeit*, 2. Band, I. Teil: Jülich (1533-1589), Bonn 1911, S. 854-858.

<sup>6</sup> C. A. Cornelius, (Hg.), *Berichte der Augenzeugen über das münsterische Wiedertäuferreich, Die Geschichtsquellen des Bistums Münster*, Zweiter Band, Münster 1853, Neudruck 1965, S. 223-224. 以下「MGQ2」。

<sup>7</sup> 巡察記録は以下を参照。Redlich, S. 21-841. 審問記録については、利用する際にその都度註で示す。

<sup>8</sup> Scribner 1987, pp. 64f.



地図1 ギスベルト、クロプリス、フィンネ関連地 (Google My Maps より作成)

## 1. 誕生～1531年2月：下ライン地方の聖職者との関係

まず、ギスベルト・ファン・ラートハイムの生まれや育ち、そして福音主義に触れた経緯を見て行く。

1534年3月4日の証言1によると、ギスベルトはブレーベレン Breberen で、ブローホのギーセン Gyssen im Broich とリスケン・ファン・デン・ディック Lyssken van den Dyck の息子として生まれた<sup>9</sup>。生年は不明である<sup>10</sup>。出生地のブレーベレンは、ユーリヒ公領の西部に位置する低地地方にほど近い村であった。父親の出身地ブローホ Broich は、ルール川沿いの都市ミュールハイム (Mülheim) の側の領主領、母親の出身地ディック Dyck は、ケルン大司教領とクレーフエ公領に挟まれた領主領にあたり、いずれもドイツ北西部下ライン地方に位置していた<sup>11</sup>。(地図1を参照)

下ライン地方で生まれ育ったギスベルトは、証言1によれば聖職者 ein preister であり、その後

<sup>9</sup> Redlich, S. 854f.

<sup>10</sup> Niepoth は、1500年頃に生まれたと述べているが、根拠は不明である。Niepoth.

<sup>11</sup> Gerhard Köbler, *Historisches Lexikon der deutschen Länder. Die deutschen Territorien vom Mittelalter bis zur Gegenwart*, 8. unveränderte Ausgabe (Sonderausgabe), München 2019, S. 99f., 151.

ゲルトルート・ファルケンベルク Gertruidt Valkenbergh という女性と結婚したという<sup>12</sup>。彼の証言には、彼が司牧していた場所は出てこないが、1533年6月23日ユーリヒ公領のミレン Millen 管区の巡察記録によって明らかにできる。この中で、管区内の集落ヘーンゲン Hoengen の主任司祭が、以前ギス氏 her Gyss、つまりギスベルトというルター派 Luters の助任司祭 cappellain がいたと述べている<sup>13</sup>。ここからは彼は、生地であるブレーベレンの南東に位置するユーリヒ公領西部のヘーンゲンで助任司祭として司牧を行っていたことが分かる。ヘーンゲンは1533年に230人の信徒を抱える小さな集落であった<sup>14</sup>。ここでギスベルトは、「ルター派」と呼ばれていたが、この時代には福音派にもさまざまな立場があったが、それらを区別せず「ルター派」と呼ぶことは珍しくなかった<sup>15</sup>。そのため、ギスベルトが福音主義を支持していたことは分かっても、実際にはルター主義を支持していたかはこの記述だけでは不明である。

彼が聖職者になる前にどこでどのような教育を受けたかは不明である。ギスベルト自身は、審問の中で、自分は愚かで無学であり、試験ではお金で許可され、人びとに教えを説くのも上手くないと述べているため<sup>16</sup>、大学での専門的な神学の教育は受けていなかったと思われる。また彼は、自身が聖職者として相応しくないという自己認識を持っていたことが伺える。

ギスベルトは、証言1で、何人かの助言を受けたために、司祭職を離れ、結婚した方が、そのような職に就いているよりも、浄福だと考えた証言している<sup>17</sup>。そこで審問官が、誰が彼に助言を行ったのかと聞くと、ヨハン・クロプリス Johann Klopryss と他の説教師たちだと答えた<sup>18</sup>。証言3では、彼が最初に福音主義の考えを持つようになったのは、説教師のクロプリスとニス氏 hern Niss によると述べている<sup>19</sup>。ギスベルトはこの二人のことを「今はミュンスターにいる」と述べているため<sup>20</sup>、このニス氏は、この審問記録が作られた1534年2月にミュンスターで活動していた説教師の一人ディオニシウス・フィンネ Dionisius Vinne だということが分かる。つまり、彼に福音主義を説き彼を福音派にしたのは、ヨハン・クロプリスとディオニシウス・フィンネという二人の説教師であった。

ここで名前が挙がったクロプリスとフィンネは、両者とも下ライン地方で聖職者として宣教活動を行ったのち、ミュンスターへ赴いた説教師である。クロプリスは、フェスト・レクリングハウゼン Vest Recklinghausen にあるボットロップ Bottrop 小教区出身であり、1518から21年にかけてケ

<sup>12</sup> Redlich, S. 855.

<sup>13</sup> Redlich, S. 506.

<sup>14</sup> 1533年6月23日の巡察記録による。ここでは“230 communicanten”とされているため、230人の聖体拝領者、つまりミサで聖体拝領すべき信徒がいたことになる。Redlich, S. 506.

<sup>15</sup> Rembert, S. 72.

<sup>16</sup> Redlich, S. 855.

<sup>17</sup> Redlich, S. 855.

<sup>18</sup> Redlich, S. 855.

<sup>19</sup> MGQ2, S. 223.

<sup>20</sup> MGQ2, S. 223.

ルン大学で学び修士号を得た後、ライン川沿いの都市ヴェーゼル、ビスリッヒ Bislich で短期間助任司祭を務め、ビューデリヒ Büderich の助任司祭職に就いた。しかし、異端の嫌疑をかけられたためケルンで投獄され、釈放された後、1529年はじめから1532年までユーリヒ公領西部の都市ヴァッセンベルク Wassenberg で説教師として司牧した。しかし、彼を庇護していた福音派の代官ヴェルナー・フォン・パラント Werner von Palant が失脚したためヴァッセンベルクにいらなくなり、一時期ヴェーゼルやかつて司牧していたビューデリッヒに滞在したのち、1533年夏までにミュンスターへ赴いた<sup>21</sup>。

フィンネは、低地地方南東部ブラバント地方の都市ディースト Diest で生まれ、1523年にはアントウェルペンで説教をしており、その後リエージュ司教領のオルデアイク Oldeneick の主任司祭を務めた。彼は1528年にヴィッテンベルク大学の学生として学籍登録されている。その後フィンネは、ユーリヒ公領に赴き、ヴァッセンベルク、ヘーンゲン、ハーフェルト Havert、スステルン Süstern といった西部のさまざまな場所を遍歴しながら、説教師として福音主義の宣教を行った。しかし、審問記録での彼自身の証言によれば、そこで福音が説教されていると聞いたために、1532年9月17日までにミュンスターへ赴いた<sup>22</sup>。

クロプリスは、ポットロップ、ヴェーゼル、ビスリッヒ、ビューデリッヒとライン川とリッペ川が交わる地域で生まれその周辺で聖職者としての職を得ていた一方、フィンネは、低地地方のディースト、アントウェルペン、オルデアイクで過ごしていたが、両者はともに1530年代はじめにはユーリヒ公領西部で福音派説教師として活動するようになり、ギスベルトに対して行ったように、協力しながら宣教を行うこともあった。(地図1を参照) 1530年代初頭にはヴァッセンベルクを中心としたユーリヒ公領西部は、研究者から「ヴァッセンベルクの説教師たち」と呼ばれる福音派説教師が集う地域となっていた<sup>23</sup>。クロプリスとフィンネ以外に、北ブラバントにあるグラールヴェ

<sup>21</sup> クロプリスについては、以下を参照。C. A. Cornelius, *Geschichte des Münsterischen Aufruhrs*, Bd. 2, Leipzig 1860, S. 344-345; Rembert, S. 310-315; Cornelius, Carl Adolf, "Klopriß, Johann" in: *Allgemeine Deutsche Biographie* 16 (1882), S. 209-211 unter Kloprys [Online-Version]; URL: <https://www.deutsche-biographie.de/pnd136071783.html#adbcontent> (2022年11月13日閲覧); 倉塚平「ミュンスター千年王国前史(5)」『政経論叢』明治大学政治経済研究所紀要52巻3/4号、1984年、24-25頁。1535年1月29日に行われたクロプリスの審問記録。Joseph Niesert (Hg.), *Münsterische Urkundensammlung*, Bd. 1, Coesfeld 1826, S. 102-135.

<sup>22</sup> フィンネについては以下を参照。Cornelius 1860, S. 343-344; Rembert, S. 302-305; 倉塚平、26-27頁。1534年10月に行われたフィンネの審問記録。MGQ2, S. 272-278.

<sup>23</sup> ヴァッセンベルクを中心とした地域で活動していた福音派説教師たちは、研究者の間で伝統的に「ヴァッセンベルクの説教師たち Wassenberger Prädikanten」と呼ばれることが多い。Rembert; Cornelius 1860; 倉塚平、23-36頁。ラルフ・クレツァーは、ヴァッセンベルクで活動していないゴットフリート・シュトラレーン Gotfrid Stralen やヘルマン・シュタプラーデ Hermann Staprade も含まれることがあるので、「ヴァッセンベルクの説教師たち」という呼称には問題があると指摘している。Ralf Klötzer, *Die Täuferherrschaft von Münster. Stadtrefomation und Welterneuerung*, Münster 1992, S. 47, A. 175. 倉塚は、実際にヴァッセンベルク周辺で活動していたクロプリス、シュラハトスカーフ、フィンネ、ロールのみを「ヴァッセンベルクの説教師たち」と呼んでいる。

Graveで生まれ、ヴァッセンベルクの説教師となった元カルメル会士のヘンリク・ロールHenrik Roll、リエージュ司教区のトンゲルンTongern出身でユーリヒ公領西部、アーヘンAachen、マーストリヒトMaastrichtなどを遍歴していたハインリヒ・フォン・トンゲルンHeinrich von Tongernまたの名をスラハトスカープSlachtscaepも、この地域で説教した後、ミュンスターへ赴いている<sup>24</sup>。ギスベルトが司牧していたヘンゲンは、ユーリヒ公領西部というこの地域の福音派宣教の中心に位置しており、同地域で宣教活動を行っていた説教師であるクロプリスやフィンネと知り合う機会には事欠かなかったであろう。

前述の通り、クロプリスとフィンネから助言を受けて、ギスベルトが実行したのは、ローマ・カトリック教会の聖職者としての地位を捨てること、そして妻帯することであった。この二つはギスベルトのみならず、この時代のカトリックの聖職者にとって不可分な関係にあった。カトリック教会では、11世紀の教会改革の時期に聖職者の妻帯に対する批判が強まり、1139年の第2ラテラノ公会議で聖職者や修道士の結婚無効が定められることで聖職者独身制が確立された<sup>25</sup>。しかし、ヴィッテンベルクのマルティン・ルターやチューリヒのフルドリヒ・ツヴィングリをはじめとする福音派の改革者は、カトリック教会の聖職者独身制を批判し、自身も妻帯を始めたため、宗教改革を支持する聖職者は妻を持つことが常となった<sup>26</sup>。その際、独身を義務づけられているカトリックの聖職者としての地位を捨てる必要があったことは言うまでもない。クロプリスとフィンネが、ギスベルトに聖職者の結婚についてどのような話をしたのかは史料からは不明であるが、カトリックの聖職者独身制を批判し、ギスベルトに結婚を勧めたことは確実である。

ギスベルトとゲルトルトの結婚式が行われたのは、ヴァッセンベルクであった。ギスベルトは1534年2月の審問記録で、彼は妻と3年いっしょにいると述べていたので、結婚したのは1531年2月頃ということになる<sup>27</sup>。証言1でギスベルトは、クロプリスが、ヴァッセンベルクにある彼の家で自分たちを結婚させたと述べている<sup>28</sup>。クロプリス自身は、スラハトスカープがギスベルトとゲルトルトをいっしょにさせたときにその場にいた、彼らから結婚の証人になるよう頼まれたと証言している<sup>29</sup>。ギスベルトは、自分たちを結婚させたのはクロプリスだと述べていたが、クロプリスの説明の方が詳細で信頼性が高いので、実際に挙式を行ったのは、スラハトスカープだったので

<sup>24</sup> ロールについては、Cornelius 1860, S. 337-341; Rembert, S. 315-338; 倉塚平、27-29頁、スラハトスカープについては Cornelius 1860, S. 348-350; Rembert, S. 305-310; 倉塚平、25-26頁を参照。

<sup>25</sup> カトリックの聖職者独身制の確立については以下を参照。関口武彦「聖職者独身制の形成—教皇改革の理解のために」『歴史学研究』754、2001年10月、17-33頁; *Helen Parish, Clerical Celibacy in the West: c.1100-1700*, London/New York, 2010, pp. 87-122.

<sup>26</sup> 改革者たちの結婚については以下を参照。Merry E. Wiesner-Hanks, *Celibacy and Virginit*y, in: Hans J. Hillerbrand (ed. in Chief), *The Oxford Encyclopedia of the Reformation*, Vol. 1, New York/Oxford, 1996, pp. 296-297; Parish, pp. 143-183.

<sup>27</sup> MGQ2, S. 223.

<sup>28</sup> Redlich, S. 855.

<sup>29</sup> Niesert, S. 129.

あろう。ギスベルトが何故スラハトスカープの名前を挙げなかったのかは不明だが、次章で見るように、後に両者は聖餐論の違いが原因で仲違いをしているため、彼の手によって結婚したと考えたくなかったのかもしれない。

聖職者の妻帯以外に、クロプリスとフィンネがギスベルトに説教したと推測されるのが、聖餐についてである。ギスベルトの審問記録では、聖餐に関する質問もなされていたが、それは初期宗教改革の時期に聖餐論は最も重要な神学的論争を引きおこした問題だったためである<sup>30</sup>。この時期の聖餐論には、二つの重要な論点があった。一つ目は、聖餐式を一種で行うか、兩種で行うかであり、二つ目は、聖餐式で用いられるパンと葡萄酒にイエス・キリストのからだと血が現在するかどうかであった。

一つ目の論点は、主にカトリックとプロテスタントのあいだの論争に関わるものである。中世以来ローマ・カトリック教会のミサでは、パンと葡萄酒の兩種を拝領できるのは聖職者に限られていた。つまり、一般信徒に与えられたのはパンのみであった。しかし、ルターをはじめとする宗教改革者たちは、聖書でイエス・キリストが命じたように、一般信徒もパンと葡萄酒の両方を受けられるようにすべきだと主張した<sup>31</sup>。そのため、福音主義が広がった場所では、パンと葡萄酒兩種による聖餐式が行われるようになった。

二つ目の論点は、カトリックとプロテスタントのみならず、プロテスタントの間でも分裂を引きおこしたものであった。ローマ・カトリック教会では、聖餐式で聖別されたパンと葡萄酒の実体は、イエス・キリストのからだと血の実体へと変化すると考えられた。そのため、カトリックのミサで用いられるパンと葡萄酒は、見た目や味、においなどはパンと葡萄酒そのままでも、実体としてはキリストのからだと血だとされた。ルターは、カトリックの実体変化の教えを批判し、パンと葡萄酒の中にはイエス・キリストの身体と血も共に現在していると主張した<sup>32</sup>。それに対し、チューリヒの改革者フルドリヒ・ツヴィングリは、聖餐式におけるパンと葡萄酒は、実際のイエス・キリストのからだと血ではなく、その象徴だと解釈した<sup>33</sup>。ルターとツヴィングリは、聖餐におけるパンと葡萄酒にキリストのからだと血が現在するかどうかをめぐって対立し、1529年に開かれたマールブルク宗教会議でもこの点で合意することはなかった。その結果、ルターの影響の強いドイツの福音派とツヴィングリの影響の強いスイスの福音派は、同盟を結ぶことに失敗した<sup>34</sup>。

それでは、ギスベルトに宣教を行ったクロプリスやフィンネの聖餐論はいかなるものだったの

<sup>30</sup> 初期宗教改革期の聖餐論については、以下を参照。A. E. マクグラス著、高柳俊一訳『宗教改革の思想』教文館、2000年、214-247頁；赤木善光『宗教改革者の聖餐論』教文館、2005年。

<sup>31</sup> マクグラス、223頁；赤木、79-83、272頁。

<sup>32</sup> マクグラス、225-226頁；赤木、120-174頁。

<sup>33</sup> マクグラス、230-235頁；赤木、309-313頁。

<sup>34</sup> 1530年代のルター派とツヴィングリ派の関係については以下を参照。野々瀬浩司「ルター派の形成過程における連携と断絶—ツヴィングリ派との関係を中心にして」森田安一編『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』教文館、2009年、27-40頁；マクグラス、238-239頁。

か。クロプリスの審問記録では、ヴァッセンベルクで両種で聖餐式を行っていたという証言が出てくる<sup>35</sup>。1533年にユーリヒ公領で行われた教会巡察によれば、フィンネは、1532年にスステルン Süsternにおいて両種で聖餐式を挙げたという<sup>36</sup>。ここから、両者は、パンと葡萄酒の両種で聖餐式を行うべきだという点では考えが一致していたことになる。

クロプリスは、審問の際に、聖餐式に真のキリストのからだと血が現在しないという罰当たりな教えにいつはじめて陥ったのかを聞かれ、ヴァッセンベルクで始めたと答えている。彼は、人はキリストの真の亡骸を信仰を通して霊的に受け取るが、それは口を使ってではなく、霊的な食事としてだと信じていると述べている<sup>37</sup>。また、別の箇所では、彼はヴァッセンベルクとビューデリッヒでツヴィングリ的な教え die Zwinglische Lere を説教したと記されている<sup>38</sup>。他方、スステルンの巡察記録で、聖餐式において真のキリストのからだと血が現在すると信じるかと聞かれた者は、キリストの死を記念するために拝領するとしか理解していない、そうフィンネとスラハトスカープは説教していたと答えた。またフィンネは、信仰において、使徒が授けたように受け取られる限りにおいて、聖餐式では真のキリストの身体と血が現在すると教えたという<sup>39</sup>。どちらも審問記録や巡察記録を作成する書記の手が介在しているため、どこまで正確に彼らの教えを伝えているかは不明だが、両者ともに、ルターよりはツヴィングリに考えが近かったことが分かる。クロプリスは、聖餐式で信徒がパンを食べることを、キリストの肉的な身体ではなく、霊的な身体を拝受することだと理解しているため、ルターとは異なり、聖餐のパンにおけるキリストのからだの現在を否定していることになる<sup>40</sup>。フィンネが教えていたというキリストの死の記念としての聖餐式という考えは、ツヴィングリの聖餐論の重要な要素でもあった<sup>41</sup>。ギスベルトは、証言3で、当時クロプロスとフィンネは考えが一致していなかったと述べているが<sup>42</sup>、両者の違いがどこにあったのかは不明である。

それでは、ギスベルトは、聖餐についてどのように考えていたのであろうか。まず両種の聖餐については、クロプリスたちの考えを受け入れていた。次章で詳しく見るように、彼は福音主義を受け入れてから、カトリックのミサに出席するのを止め、福音主義的な両種による聖餐式に行くようになったことから確実である。これは、福音派に共通した信仰であるため、ギスベルトが受け入れたのは自然である。それに対し、象徴主義的な聖餐論には、肯定的な態度を見せなかった。彼は証

<sup>35</sup> Niesert, S. 104.

<sup>36</sup> Redlich, S. 95; Rembert, S. 303.

<sup>37</sup> Niesert, S. 108.

<sup>38</sup> Niesert, S. 107.

<sup>39</sup> Redlich, S. 94f.; Rembert, S. 303; 倉塚平、30頁。

<sup>40</sup> ただし、クロプリスは、ツヴィングリの教えをそのまま受け入れてはおらず、むしろヘンリク・ロルの強い影響を受けていた可能性が高い。彼は審問記録で、ロルからの彼の著作『聖餐の秘密の鍵』を借りたと証言しているためである。Niesert, S. 104. ただし、本稿ではクロプリスに対するロルの影響について十分検討する用意がないため、この問題にこれ以上触れることはできない。

<sup>41</sup> マクグラス、229-230頁。

<sup>42</sup> MGQ2, S. 223.

言1でミサについてどう思うか聞かれ、我らが主イエス・キリストのからだと血の真のしるし *ein wairhaftig zeichen* だと答えている。その次に、キリストの身体と血が本質的に本物かどうかを聞かれた際には、この点について彼の信仰はまだ弱すぎるので、教えを受けたいと頼んでいた<sup>43</sup>。しかし、証言3で彼は、クロプリスやフィンネとはサクラメントについて考えが違いキリストの真の身体と血だと信じていると述べている<sup>44</sup>。彼は証言1では「真のからだと血」に「しるし」をつけているのに対し、証言3では明白に真のからだと血の現在を明言するなど、証言に一貫性が欠けている。そのため、自身が言うように、聖餐についての考えが揺れていたのだと思われる。ただし、キリストの身体と血の現在を完全に否定することは述べていないため、単なる象徴だとは考えていなかったはずである。

ギスベルトは、カトリックのミサを否定し、両種による聖餐式を認め、聖餐式におけるイエス・キリストのからだと血の現在を概ね認めるという意味では、ルターに近い立場を採っているようにも思える。ただし、ギスベルトが、ルターの聖餐論について学んだ形跡は見られないため、直接の影響というよりは、下ライン地方の説教師たちから受けた教えのうち、受け入れる要素を取捨選択した結果だという可能性の方が高い。

## 2. 1531年2月～34年はじめ：家族と貴族との関係

ヘーンゲンの助任司祭としての地位を捨て、1531年2月頃にゲルトルートと結婚した後の時期のギスベルトの活動を見て行く。

ギスベルトは、聖職者を辞め、結婚したことで、それまでとは大きく異なる生活環境に置かれるようになった。まずは、審問記録に基づき、彼が新たにはじめた家族生活を見て行く。

彼の妻ゲルトルート・ファルケンベルクは、元修道女であった。ギスベルトの証言によれば、彼女は低地地方南部の都市マーストリヒトのニューエンホフ修道院 *Newenhof* にいたが、妊娠し、子どもを産んだために、修道院を離れることになった<sup>45</sup>。彼女はその後アーヘンで3から4年を過ごしてており、審問が行われた1534年2月の時点で9歳になる男の子どもがいた<sup>46</sup>。ここから、ゲルトルートが、妊娠したのは1525年頃だと推測できる。ゲルトルートには、ヨハン・ファルケンベルク *Johan Valckenberg* という兄弟がいた<sup>47</sup>。彼はユーリヒ公領西部の都市ジッタルト *Sittard* 近くにある都市ノイシュタット *Neustadt* のシュルトハイスで、マーストリヒトに居住していた<sup>48</sup>。

<sup>43</sup> Redlich, S. 856.

<sup>44</sup> MGQ2, S. 223.

<sup>45</sup> Redlich, S. 855; MGQ2, S. 223.

<sup>46</sup> Redlich, S. 855. 修道院を離れた後のゲストルートについてギスベルトは、“zo Aichen bi Drynborn drei oder vier jaer gedeint.”と述べているが、Drynbornがシュライデン *Schleiden* 近郊の集落の *Dreiborn* を指すのか、アーヘンに住む人の名前を指すのかは不明である。

<sup>47</sup> MGQ2, S. 223.

<sup>48</sup> Rembert, S. 77, 339; Bax, p. 52.

ギスベルトが、ヘーンゲンを離れた後に移り住んだのは、ユーリヒ公領西部ヴァッセンベルク管区にある集落ラートハイム Ratheim であった。審問記録の書記の覚え書きからは、ギスベルトが逃亡したあと、つまり1533年6月にはムルストロー Mulstrue のところに住んでいることが確認できる<sup>49</sup>。また、彼は証言3では、ムルストロー Mulstroe の団体付き司祭 Mulstroes capellan と呼ばれていた<sup>50</sup>。この二箇所に出てくるムルストローとは、領主であるオルミッセン Olmissen 家の通称である<sup>51</sup>。つまり、ギスベルトは、ムルストローが所有する宮殿 Haus Hall 付きの司祭として雇われたことになる<sup>52</sup>。ムルストローが、ギスベルトを自身の宮殿付き司祭として呼んだのは、福音派だったためだと思われる<sup>53</sup>。証言1でギスベルトは、彼とゲルトルートの間二人の子どもがいた<sup>54</sup>、彼の妻と子どもたちはラートハイム Rotten に住んでいると述べているので<sup>55</sup>、ギスベルト一家は、宮殿のすぐ近くにあるラートハイムに住んでいたことが分かる。彼とゲルトルートのあいだには2人子どもがいたが、ゲルトルートが生んだ9歳の少年は、ゲルトルートとギスベルトによって養われていたため<sup>56</sup>、1534年2月までに二人の間に子どもが一人生まれたことになる。

こうして福音派の領主のもとで司牧するようになったギスベルトだが、ラートハイムに来てからも、引き続き他の福音派説教師との関係は続いていたようである。クロプリスとフィンネがラートハイムの彼の家に来ていたかは審問記録からははっきりしないが、ギスベルトと両者の関係の深さを考えれば、クロプリスは少なくとも1532年にヴァッセンベルクを離れるまで、フィンネは1532年9月にミュンスターに赴くまでは、ギスベルトの家に来て説教する機会があったと考えるのが自然であろう。

審問記録から確認できるのは、スラハトスカープとの関係である。彼は、「ハインリヒ・トンゲルン Hinrich Tongern は、以前に何回か我が慈父深き主〔ユーリヒ公—引用者補〕の最初の命令の前に、彼の家で説教した。彼らはサクラメントについて二つに分かれた。そして彼は彼の家に鍵を掛け、彼らがこの点について折り合いが付くまで、そのようなことで苦しみたくなかった」と証言している<sup>57</sup>。ここで言及されているのは、ユーリヒ公ヨハンが、1532年11月1日に公布したヨハネ

<sup>49</sup> Redlich, S. 506; Bax, p. 52.

<sup>50</sup> MGQ2, S. 222f.

<sup>51</sup> オルミッセン家については、以下を参照。Joseph Strange, *Beiträge zur Genealogie der adligen Geschlechter*, 6. Band, Köln 1868, S. 18-65.

<sup>52</sup> ヨハン・フォン・オルミッセン Johan von Olmissen が、1510年に宮殿の完全な所有権を、ヴェルナー・フォン・パラントから獲得している。Strange, S. 19.

<sup>53</sup> オルミッセン家の人びとは、この頃から16世紀を通じて福音派であった。ムルストローと福音主義の関係については、以下を参照。Rembert, S. 156f, 273; Heinrich Forsthoff, *Rheinische Kirchengeschichte. Bd. 1: Die Reformation am Niederrhein*, Essen 1929, S. 117, 127, 146, 338.

<sup>54</sup> MGQ2, S. 223.

<sup>55</sup> Redlich, S. 855.

<sup>56</sup> Redlich, S. 855.

<sup>57</sup> MGQ2, S. 224.

ス・カンパヌス Johannes Campanus とスラハトスカーフをはじめとする福音派説教師の取り締まりを命じた勅令のことだと考えられる<sup>58</sup>。そのため、スラハトスカーフは、ギスベルトの一家がラートハイムに移り住んだあとも1532年秋までは、彼らの家を訪問し、説教をしていたことが分かる。

ただし、ギスベルトは、スラハトスカーフとのあいだで sacrament に関する意見が異なり、決裂したと述べている。彼らの不和を引きおこしたのは、おそらく聖餐式でのキリストのからだと血の現在についてだと推測できる。スラハトスカーフもまた、司祭が聖餐式で聖別したパンと葡萄酒にキリストのからだと血が現在しているとは考えていなかった<sup>59</sup>。しかし、前章で見たとおり、ギスベルトは、パンにおけるキリストを象徴だと見なす解釈に同調していなかった。そのため、スラハトスカーフとのあいだで意見の対立が起こり、彼を家に入れようとしなくなるまで不仲になったのだと考えられる。

しかし、ギスベルトは、カトリックの聖餐論をそのまま信じ続けていたわけではなかった。彼は証言で、以前の復活祭に2年にわたりルーリヒ Rurich に赴き、両種による聖餐を拝受したと述べている<sup>60</sup>。彼に両種の聖餐を与えたのは誰かと聞かれたところ、ギスベルトは、ロイシェンベルク Reuschenberg の団体付き司祭 capellaen であるヨハン Johann だと述べていた<sup>61</sup>。ルーリヒはラートハイムからそれほど離れていない場所で、ここには領主であるロイシェンベルク家が所有するルーリヒ宮殿があった<sup>62</sup>。聖餐式で、両種つまりパンと葡萄酒両方を拝領するというやり方は、福音派に共通したものであった。そのため、ギスベルトは、ルーリヒ宮殿付き司祭ヨハンが福音派だということを知っており、彼に福音主義的な聖餐式を挙げるよう求めたことになる。

また、彼は審問官から、何故以前の復活祭に聖体拝領しなかったのかと聞かれ、彼がラートハイムの司祭に両種による聖体拝領をお願いしたところ、それは許されていないと拒否されたため、聖餐式に行かなかったと述べている<sup>63</sup>。この証言から、ギスベルトは、カトリックのパンのみによって挙げられるミサを認めておらず、福音派主義に基づく両種による聖餐式のみを正当なものだと考えていたことが分かる。

ただし、彼の妻ゲルトルートは、証言1によると、他の者たちと同じように教会と礼拝式に行っ

<sup>58</sup> Rembert, S. 210, 306. 勅令の文面は以下を参照。Ludwig Keller, *Geschichte der Wiedertäufer und ihres Reichs zu Münster. Nebst ungedruckten Urkunden*, Münster 1880, S. 295f.

<sup>59</sup> Rembert, S. 307.

<sup>60</sup> Redlich, S. 856. おそらく1531年と32年の復活祭だと解釈できるのではないかと考えているが、審問記録の以下の該当箇所が難解で正確に理解できないため、確信を持ってはいない。“(...) saigt lestmail in vergangen ziiden werde dissen paeschen zwei jaire, das er zo Roerich bi Reuschenberg zom sacrament gegangen, da have hei es under beider gestalt untfangen.”

<sup>61</sup> Redlich, S. 856.

<sup>62</sup> Paul Clemen (Hg.), *Die Kunstdenkmäler der Rheinprovinz im Auftrage des Provinzialverbandes, 8. Band. II. Die Kunstdenkmäler der Kreise Erkelenz und Geilenkirchen*, Düsseldorf 1904, S. 96-101.

<sup>63</sup> Redlich, S. 856.

ていた<sup>64</sup>。ゲルトルートは、夫のギスベルトの信仰を間近に見て、場合によってはギスベルトから福音主義的な聖餐論について聞かされる機会もあったであろうし、ギスベルトのところに来た説教師たちの話をいっしょに聞いていた可能性が高い。この証言を信頼するならば、ゲルトルートに対する夫や福音派説教師の宣教は効果を上げなかったことになる。

ユーリヒ公による福音派説教師取り締まりが出ると、ギスベルトは、彼が住んでいたラートハイムを追放されることになった。ただし、ギスベルトの証言によると、彼の妻は福音主義を信仰していなかったため、その場所に留まる許可を得られたということなので<sup>65</sup>、妻と子をラートハイムに残し、ギスベルトは一人で住まいを離れたことになる。

追放されたギスベルトは、下ライン地方の各地を転々とするのを余儀なくされた。審問記録で彼は、自身を受け入れてくれた支援者の名前を挙げている<sup>66</sup>。期間は不明だがミュッデルスハイム Müddersheim の領主ミヒヤエル・ファン・キンツヴァイラー Michael van Kintzweiler<sup>67</sup>、マーストリヒトの義兄弟ヨハン・ファルケンベルクのところに14日滞在した。そこからエルゼン Elsen の修道女のところで4～5日（修道女はいなかったという）、その後ケルンで3～4週間、領主ヘルマン・ウプ・デア・エルフト Herman up der Erft のところで4～5日を過ごした。さらにトゥッシュェンブローホ Tüschenbroich にいるハイデン Heiden の領主のところにもいくらかのあいだ滞在した。ハーフェルトでは、福音主義を信奉するリートゲン・ファン・デア・ヘッゲン Lietgen van der Heggen のところに一晚泊まり（リートゲンはおらずその妻が泊めてくれたという）、かつて司牧していたヘーンゲンでは14日、ガンゲルト Gangelt のリートゲン・モイフェルス Lietgen Meuffels のところに一晚滞在した。

ギスベルトの滞在を受け入れた者のうち、領主が3人、親族が1人、修道女が1人、一般の住民が2人であった。名前が挙げられている2人のリートゲンのうち一人は福音主義の支持者だと明言されていた。もう一人はギスベルトが以前司牧していたヘーンゲンの住人なので、彼の影響で福音主義を支持するようになった者である可能性が高い。領主3人が何故ギスベルトを受け入れたのかも不明だが、貴族である彼らがユーリヒ公が出した福音派説教師追放令を知らないということは考えにくく、ムルストローのように、福音主義を支持していたためだと考えるのが自然であろう。その際、ムルストローが、他の領主に口利きをしていた可能性も考えられる。ただし、ギスベルトは、説教をしたり、本を読んだりしなかった、つまり福音主義の宣教は行っていなかったと証言している<sup>68</sup>。また、ギスベルトが各地に滞在を許されたのは、短い間であった。さらに、ヘーンゲンの

<sup>64</sup> Redlich, S. 856.

<sup>65</sup> MGQ2, S. 223.

<sup>66</sup> 以下のギスベルトの滞在先の記述は以下を参照。Redlich, S. 857; MGQ2, S. 223f.; Rembert, S. 340; Habets, p. 215.

<sup>67</sup> MGQ2, S. 223では Michel、Redlich, S. 857では Wilhem と名前に食い違いがある。しかし、この時期のキンツヴァイラー家の主人は、ミヒヤエルだったため、ヴィルヘルムの方は間違いだと思われる。Strange, 8ff.

<sup>68</sup> Redlich, S. 857.



地図2 ラートハイム時代のギスベルト関連地 (Google My Mapsより作成)

福音派リートゲン・ニッセルスLietgen Nissersは、ギスベルトを泊めることを拒否し、代わりに食糧をいくらか与えたという<sup>69</sup>。このことは、たとえ福音派や親族であろうと、ユーリヒ公の命令に明確に背くという危険を犯してまで長い間ギスベルトを匿おうという者はいなかったことを示している。

ギスベルトが滞在した場所を見ると、彼が居住していたラートハイム周辺が多かったことが分かる。(地図2を参照) 滞在地の最も東がライン川沿いの都市ケルン、最も西が低地地方最東部の都市マーストリヒト、最も北がラートハイムからも近いトゥッシェンブローホ、最も南がミュッデルスハイムで、いずれも下ライン地方とそこに隣接する低地地方に位置している。ギスベルトにとっては、生まれてからこの時まで一貫して居住や活動をしてきた地域であり、彼の持っていた人脈は

<sup>69</sup> MGQ2, S. 224. 彼は1533年のユーリヒ公領の巡察記録で、ハインリヒ・ロールの手紙を持っていたとして言及されているため、ロールの支持者だったと思われる。C. A. Cornelius, *Geschichte des Münsterischen Aufruhrs. Erstes Buch. Die Reformation*, Leipzig 1855, S. 225. 1534年2月にヤコブ・フォン・オッセンブルクが、ハーゲンの彼のところを訪れていた。しかし、リートゲンは、この時も誘いを断っている。MGQ2, S. 221.

この地域の中で育まれてきたものだということが分かる。

結局ギスベルトは、ムルストローに取りなしを頼み、ハインスベルク Heinsberg のフォークトから、ユーリヒ公領での滞在許可を手に入れることができた<sup>70</sup>。そのため彼は、再び妻と子どもとともにラートハイムで暮らすようになった。

審問記録には、ギスベルトが、ラートハイムでどのような司牧活動を行っていたかを示す証言は乏しい。しかし、おそらくこの時期に、ギスベルトが、ゴスウィンとマリーエン・スパーン Goswin und Marien Spaen の結婚式を挙げたという証言がある。彼は、ラートハイムの自分の家で、古いキリスト教的な慣習に則って、ドイツ語でそれを行ったと述べている<sup>71</sup>。16世紀はじめには、結婚式のやり方は、カトリックであれプロテスタントであれ明確に決まっておらず、地域によってさまざまであり、式を挙げる場所も教会とは限っていなかった<sup>72</sup>。そのため、ギスベルトが家でドイツ語で結婚式を挙げたとしても、彼が述べるように、地域の慣習的なやり方を踏襲しただけかもしれない。しかし、ラートハイムの教区教会の司祭ではなく、あえてギスベルトに式を頼んだということは、ゴスウィンとマリーエン夫妻は福音派だったのであろう。

### 3. 1534年2月以降：ミュンスターからの使者との関係

追放から戻り妻子とともにラートハイムでの生活を再開したギスベルトだが、彼を含めた下ライン地方の福音派の運命を大きく左右する出来事が、ヴェストファーレン地方の中心都市ミュンスターで起こった。1534年2月はじめに再洗礼派と他宗派の支持者が武装対立を引きおこし、その結果再洗礼派以外の住民の多くが市外に逃亡した。こうして市内に残った住民の多くが再洗礼派になった2月23日に市参事会員選挙が行われ、再洗礼派が市長を含めた市参事会員の席を占有する結果となった。これによって、再洗礼派は、合法的にミュンスター市の統治権を握った。

再洗礼派とは、真の洗礼とは、教えを受け、理解した上で、キリスト教徒として生きることを自由意志によって決意することで成り立つという立場を採る福音派である<sup>73</sup>。この時代には生後間もない嬰兒に洗礼を行うことが常であったが、彼らは信仰を持たない幼児への洗礼は正しい洗礼だと

<sup>70</sup> Redlich, S. 857; MGQ2, S. 223; Rembert, S. 340.

<sup>71</sup> Redlich, S. 856f.

<sup>72</sup> 近世の結婚式については以下を参照。Edward Muir, *Ritual in Early Modern Europe*, 2. Edition, Cambridge, 2005, pp. 37–50; Johan Bossy, *Christianity in the West 1400-1700*, New York, 1985, pp. 19–26; R. v. デュルメン著、佐藤正樹訳『近世の文化と日常生活1『家』とその住人－16世紀から18世紀まで』鳥影社、1993年、175–261頁。

<sup>73</sup> 再洗礼派については、以下を参照。永本哲也、猪刈由紀、早川朝子、山本大丙編『旅する教会 再洗礼派と宗教改革』新教出版社、2017年；出村彰『再洗礼派 宗教改革時代のラディカリストたち』日本基督教団出版局、1970年；John D. Roth and James M. Stayer (eds.), *A Companion to Anabaptism and Spiritualism, 1521-1700*, Leiden/Boston, 2007; Astrid von Schlachta, *Täufer. Von der Reformation ins 21. Jahrhundert*, Tübingen, 2020; Brian C. Brewer (ed.), *T&T Clark Handbook of Anabaptism*, London/New York/Oxford/New Delhi/Sydney, 2022.

認めず、自覚的な信仰を持つ成人に対して洗礼を行った。しかし、ローマ・カトリック教会もルター派やツヴィングリ派の教会も、幼児洗礼を正当なものだと認めていたため、成人になってからの洗礼は二度目の洗礼だと見なし異端視した。そのため、再洗礼派は各地で異端、反乱者として禁止され、世俗権力の取り締まり対象とされていた。神聖ローマ帝国では、既に1529年のシュパイヤー帝国議会で、再洗礼派は死をもって禁じられていたため、再洗礼派がミュンスターを支配するようになると、都市の君主であるミュンスター司教は、反乱者から都市を奪還するために、傭兵を雇い都市を包囲した<sup>74</sup>。

ミュンスターの再洗礼派は、防御を固め包囲戦に備えつつ、低地地方や下ライン地方に使者を派遣し、各地の福音派にミュンスターに移住するよう呼びかけた。そこでミュンスターから下ライン地方に派遣されたのがヤコブ・フォン・オッセンブルク Jacob von Ossenburg である。ヤコブは、既にヴァッセンベルクに派遣されていたペーター・フォン・ドレメン Peter von Dremmen と合流し、下ライン地方各地で宣教を行い、ギスベルトを含めた36人の同行者を見つけ、ミュンスターへ向かう途中にクレーフエ公の官吏によって逮捕された<sup>75</sup>。ギスベルトもこの時逮捕された同行者の一人であった。この章では、彼の証言から、この時期の彼をめぐる宣教について検証する。

まず、ヤコブとペーターが、何故ギスベルトのところにやって来たのかを考える。ヤコブは逮捕された後に行われた審問で、ヨハン・クロプリスが彼を派遣し、旅費を与えたと証言している<sup>76</sup>。さらにヤコブは、ペーターをクロプリスによってヴァッセンベルクの代官のところに派遣された若い奉公人だと述べている<sup>77</sup>。ここから下ライン地方への使者の派遣は、クロプリスが行ったものだと分かる。クロプリスは、下ライン地方にいたときに、フィンネやスラハトスカープとともにギスベルトに説教をして、彼を福音主義の支持者へと変えた人物である。永本は、クロプリスたち下ライン地方の説教師がミュンスターに移り住んだ後も、かつての宣教地の福音派と手紙を通じてやり取りしていた可能性があること、そしてヤコブが宣教をしていたのは事前に支持者がいることを知っていた場所だったことを指摘している<sup>78</sup>。実際に、クロプリスは審問記録で、ペーターとヤコブがヴェーゼルからヴァッセンベルクまでの道や村々を書き留めるよう彼に求めたために、それを与えたと証言している<sup>79</sup>。つまり、クロプリスが、事前にかかなりの程度彼らの行き先を

<sup>74</sup> ミュンスターでの再洗礼派運動の発展については以下を参照。永本哲也『ミュンスター宗教改革 1525-34年 反教権主義的騒擾、宗教改革・再洗礼派運動の全体像』東北大学出版会、2018年；倉塚平「ミュンスターの宗教改革―再洗礼派千年王国への道―」中村賢二郎、倉塚平編『宗教改革と都市』刀水書房、1983年、260-316頁。

<sup>75</sup> ヤコブたちの宣教とミュンスター行きについては以下を参照。永本哲也「1534年2月下ライン地方における宗教改革思想・再洗礼主義の伝播 ―ヤコブ・フォン・オッセンブルクによるミュンスター再洗礼派の宣教分析を通じて―」『エクフラシス』3、2013年、161-177頁。

<sup>76</sup> Niesert, S. 156.

<sup>77</sup> MGQ2, S. 221.

<sup>78</sup> 永本2013、172-175頁。

<sup>79</sup> Niesert, S. 123.

決めていたことになる。ここから、クロプリスは、ギスベルトと手紙などを通じてやり取りを保っており、ラートハイムにギスベルトがいることを知っていたため、ヤーコブとペーターに彼のところへ赴くよう指示していた可能性が高い。

次にヤーコブとペーターが宣教の際にギスベルトに伝えた内容について見て行く。ギスベルトは、証言1で、何故セクトに入ろうとしたのかと聞かれ、ヤーコブが彼に奇跡のしるし *die wonderzeichen* と奇跡的な出来事について非常に残酷に、恐ろしい様子で話したためだと答えた<sup>80</sup>。彼によると、彼らは、世界は14日以内に罰されると考えていた。ミュンスターでは血の雨が降り、恐ろしい青と黒の雲が見られ、預言者が奇跡的な出来事 *wonderliche dingen* について預言した。ミュンスターにしか安全と平和がなくなるというので、伝えられたことを見聞きしようとそこへ旅しようとしたという<sup>81</sup>。証言2によると、ギスベルトは、人びとにヤーコブから聞いたこと、つまりいかに神がこの世界を罰するか、ミュンスターは新しいエルサレムであり、彼らは守られ、養われるはずだということ伝えた<sup>82</sup>。証言3では、ヤーコブとペーターの勧めで、彼らが見た奇跡 *wunders* を聞き知るために旅に出ることにして、彼ら二人を自分の家に泊めたという<sup>83</sup>。ギスベルトが、ヤーコブとペーターから聞いたと証言していることは、どれもヤーコブ自身が審問の際に証言している内容と一致しており信憑性が高い<sup>84</sup>。

以上のように、ギスベルトが、ミュンスター行きを決意したのは、ミュンスターから派遣された二人の使者から、ミュンスターで起こった奇跡のしるし、そして神がもうすぐ世界を罰するという預言について聞き、地上で唯一安全が保証されるミュンスターに行き、ヤーコブたちから聞いたことを自分で聞き知るためであった。ただし、ギスベルトは、妻やムルストロー親子に、自分は14日以内に戻ってくるつもりだと述べたという<sup>85</sup>。そのため、彼の証言からは、ヤーコブたちの話に大きな関心を持ちつつ、完全に信じていたわけではなかったことが伺える。

ただし、ギスベルトは、ヤーコブたちからそれ以外の教えを受けたことについては否認してい

---

<sup>80</sup> Redlich, S. 855. 原文は “das Jacob innen die wonderzeichen und dingen so grausam und erschrecklich aingesaigt,” “dingen” が何を指すかははっきりしないが、おそらくミュンスターで起こったとされる奇跡的な出来事のことを指すと思われる。

<sup>81</sup> Redlich, S. 855f.

<sup>82</sup> Redlich, S. 858. 原文は以下の通り。“Er bekant, er have diesem folk aus ansagen Jacobs de vermeinte zeichen also erschrecklich ausgelaucht, we das Got de welt straffen wold, aver Munster sold neu Jerusalem sein, da solden de siene erhalten und ernert werden;” “diesem folk この民” は、再洗礼派のことだと思われる。“ausgelaucht” の意味ははっきりしないが、ここでは高地ドイツ語の “ausziehen 抜き出す” を意味する低地ドイツ語の単語 “utluken” の過去分詞だと理解し、ヤコブの言葉から抜き出したことを人びとに語ったと解釈した。この審問記録自体は高地ドイツ語で書かれているが、下ライン地方は低地ドイツ語との境界領域であるため、低地ドイツ語の単語が混じって使われたのではないかと推測したためである。しかし、やや苦しい推測であることは否めず正しいかどうかの確信はない。

<sup>83</sup> MGQ2, S. 223.

<sup>84</sup> Niesert, S. 155-157; 永本哲也 2013, 167-168頁。

<sup>85</sup> Redlich, S. 855, 856.

た。証言3で彼は、ヤーコブとペーターからは、ミュンスター市内には洗礼をされていない子どもがたくさんいる以外には、洗礼については特別なことは聞かなかったと述べている<sup>86</sup>。証言1で幼児洗礼をどう思うかと聞かれたときには、彼はそれは救いのために十分なものだと思っていると述べた<sup>87</sup>。彼または妻が再洗礼を受けたかどうかを聞かれた際にも、どちらも受けておらず、彼はミュンスターから与えられる慰めのために赴くのだと証言している<sup>88</sup>。ヤーコブもまた、彼の仲間の中に洗礼を受けた者はいないと述べているため<sup>89</sup>、この証言は信頼できる。また、証言2で彼は、ミュンスター簡条を知らず、ヤーコブはそれについて彼に語らなかったと述べた。そして、簡条が読み上げられたあとこれを信じるか否かと聞かれた際には、聞いたこともなく、受け入れるつもりもないと答えた<sup>90</sup>。幼児洗礼批判と成人洗礼は再洗礼派の核心を成す教えであり、ミュンスター簡条は、再洗礼派の敵がミュンスター再洗礼派の主要な教えを簡条書として簡潔にまとめたものである<sup>91</sup>。証言をそのまま受け取るならば、ギスベルトは、ヤーコブたちが伝えた奇跡には大きな興味を持ったが、再洗礼派の教えを信じたわけではなかったことになる。

既に見た証言2で述べていたように、ギスベルトは、彼の周辺の人びとにヤーコブから聞いたことを伝えていた。ギスベルトは、証言1によれば、ハインスベルクでヨハン・ファン・ドーフェレン Johann van Doveren に、ヤーコブから聞いたミュンスターの奇跡のしるしについて話したという<sup>92</sup>。さらに、ミュンスター行きについて彼の雇い主であるムルストロー親子にも話していた。その際、ムルストローの2番目の息子といっしょに行こうとしたかどうかを聞かれ、貴族のルートヴィヒ juncker Lodwych は、そこ（ラートハイム）で神を待つつもりなので、共に行く気はないと彼に告げたと証言した<sup>93</sup>。年長のムルストロー alde Mulstroe（ルートヴィヒの父ヨハン<sup>94</sup>）は、彼

<sup>86</sup> MGQ2, S. 223.

<sup>87</sup> Redlich, S. 855.

<sup>88</sup> Redlich, S. 856.

<sup>89</sup> MGQ2, S. 222.

<sup>90</sup> Redlich, S. 858. この箇所も難解なので読み間違えている可能性がある。原文は以下の通り。“Auf verlesen der artickelen gefragt, wes er der gelof ader anneme, sacht he have derselbigen nit mehe gehort, so wiss er si ouch niet anzunemen.”

<sup>91</sup> キルヒホフによれば、このミュンスター簡条は、再洗礼派の敵側によって1534年1月半ばに作成され、ミュンスター司教に伝えられた。司教は、ユーリヒ公にもこれを送っている。Karl-Heinz Kirchhoff, Die Täufer im Münsterland. Verbreitung und Verfolgung des Täufertums im Stift Münster 1533-1550, in: *Westfälische Zeitschrift* 113, 1963, S. 22, A. 139. ドイツ語本文は、以下を参照。Heinrich Detmer (Hg.), Ungedruckte Quellen zur Geschichte der Wiedertäufer in Münster, in: *Zeitschrift für vaterländische Geschichte und Alterthumskunde* 51, 1893, S. 114-118. ラテン語訳。Heinrich Detmer (Hg.), *Hermannii a Kerssenbroch. Anabaptistici furoris Monasterium inclitam Westphaliae metropolim evertentis historia narratio, Zweite Hälfte. Die Geschichtsquellen des Bistums Münster 6. Band*, Münster 1899, S. 448-451.

<sup>92</sup> Redlich, S. 857.

<sup>93</sup> Redlich, S. 856.

<sup>94</sup> ヨハン・ムルストロー Johann Mulstroe には、ハインリヒ Heinrich、ルートヴィヒ Ludwig、ヨハン Johann の3人の息子がいた。Strange, S. 19f.

が再び彼のところに戻ってくるように、馬と従者を送りどけたという<sup>95</sup>。

ギスベルトの誘いを断り、ミュンスターへ行くことを拒否したのは、ムルストロー親子だけでなく、彼の妻ゲルトルートも同様であった。彼は何故彼の妻が仲間にはいないのかと聞かれた際に、彼が行こうとすると妻が叫びながら後を追ってきて、二人の子どもを彼に見せながら、彼女のところに留まるよう頼んだと返答した。それに対しギスベルトは、14日以内に戻ってくるつもりだと答えたという<sup>96</sup>。ゲルトルートは、おそらくギスベルトと共に、彼女の家に来たヤーコブとペーターの話聞いていたはずだが、にもかかわらず、彼らの言うことを信じてミュンスターに行こうとは思わず、反対に夫の旅を止めさせようとしていたことになる。

こうして妻の懇願を振り切ったギスベルトは、証言2によると、先ずラートハイムからほど近いエッセンブローホEsschenbroichに行き、そこで他の同行者と合流した<sup>97</sup>。しかし、ギスベルトを含めた38人が船でノイスを出航した後、2月末にデュッセルドルフでユーリヒ公の官吏によって取監されたことによって、彼らのミュンスター行きは失敗に終わった<sup>98</sup>。

その後のギスベルトの行方が史料で確認できるようになるのは、1535年2月のマーストリヒトである<sup>99</sup>。マーストリヒトでは、1535年1月に市参事会が再洗礼派を一斉検挙し、1月末から2月はじめにかけて逮捕された再洗礼派たちに対する審問が行われた<sup>100</sup>。彼らの審問記録で、ギスベルトが、キリスト降誕祭(12月25日)にルート・ケーテルブータースRuth Ketelbuetersの家で開かれた秘密集会<sup>101</sup>、さらにキリスト降誕祭のあとに聖アントニウス修道院の財産管理人ディーリケ・ファン・リーケDiericke van Lieckeの家で行われた秘密集会に参加したという証言が見られた<sup>102</sup>。このことから、ギスベルトは、1534年2月に逮捕されたあと程なくして釈放され、その後マーストリヒトに赴いたことが分かる。ギスベルトは、ユーリヒで逮捕された時の証言をそのまま受け取れば、再洗礼も受けておらず、再洗礼派の主要な教えも信じていなかった。さらに彼は審問の際に、自分はお上に反することをを行う者たちの仲間ではないと明言し、全てのキリスト教秩序に従い、従順を保つと述べつつ、ユーリヒ公に恩赦を求めていたので、これも公の官吏の心証を良くしたのかもしれない<sup>103</sup>。いずれにせよ、ミュンスター再洗礼派に積極的に与する者だとは見なされず処刑されず釈放されたのであろう。ギスベルトが妻子の待つラートハイムに帰らなかった理由は不

<sup>95</sup> Redlich, S. 856.

<sup>96</sup> Redlich, S. 855.

<sup>97</sup> Redlich, S. 857.

<sup>98</sup> MGQ2, S. 220, 225.

<sup>99</sup> マーストリヒト滞在については以下を参照。Bax, pp. 54f., 118, 121; Rembert, S. 340.

<sup>100</sup> これらの審問記録は以下で刊行されている。Habets, pp. 133-161.

<sup>101</sup> Habets, p. 146. マティス・シュパンゲメッカー Mathys Spangemecker の1535年1月23日とそれ以降に行われた審問での証言に基づく。

<sup>102</sup> Habets, p. 154. セルフォース・フューゲン Servos Fuegen の1535年2月3日とそれ以降に行われた審問での証言に基づく。

<sup>103</sup> Redlich, S. 858.

明であるが、釈放されたとはいえ、一度再洗礼派だという嫌疑がかかりユーリヒ公の官吏に逮捕されているため、ユーリヒ公領から追放され、帰れなかった可能性が高い。ギスベルトが、逃亡する場所としてマーストリヒトを選んだ理由は不明だが、妻ゲルトルトの兄弟ヨハンを頼った可能性が高い。さらに、ハベッツによれば、マーストリヒトは、隣接するユーリヒ公領西部の福音派が逃亡先として多数流入していた都市だったので<sup>104</sup>、この地域出身のギスベルトにとって、避難場所としてより選びやすかったとも考えられる。

マーストリヒトでは、1534年夏にヘンリク・ロールがやって来てから、彼が指導者となり市内で信仰洗礼が行われるようになった。ロールは9月に逮捕・処刑されたが、その後も鍛冶屋ツンフトの親方であるヤン・スメイトヘン Jan Smeitgen を中心に、再洗礼派共同体が形作られていった<sup>105</sup>。1535年1月の大量逮捕後に行われた審問記録からは、彼らと周辺のリバプルト派との間につながりがあったことが分かる。マーストリヒトで開かれた秘密集会では、ミュンスターで12月に印刷され、ある女性によってアムステルダムから持ち込まれた小著が読み上げられたり、呼びかけがあったらミュンスターへ進軍することになっているという噂が伝えられていた<sup>106</sup>。このようにマーストリヒトの再洗礼派は、ミュンスターを中心として、低地地方や下ライン地方に広がっていた人、本、噂によって形作られるネットワークにつながっていた。ギスベルトは、マーストリヒトで再洗礼派の秘密集会に参加していたため、遅くとも1534年末までには、明確に再洗礼主義を支持するようになったことになる。誰の影響で再洗礼派になったのかは不明だが、マーストリヒトに来た時期が1534年9月までならロール、それ以降ならスメイトヘンの影響が強かったであろう。

レンベルトが書き起こした審問記録に同封された手紙などから、ギスベルトは、1536年にクレーフエの司祭ヘルマン・タック・フォン・クレーフエ Herm. Tack von Cleve とともにケルン選帝侯に引き渡され、カイザーズヴェルト Kaiserswert で投獄されたことが分かる<sup>107</sup>。その後ギスベルトが、ミュンスター占領後に低地地方の再洗礼派指導者となったメノー・シモンズ Menno Simons の支持者として活動したかについては、研究者の意見が分かれているため、本稿では深く立ち入らない<sup>108</sup>。

<sup>104</sup> Habets, S. 100f., 120.

<sup>105</sup> この時期のマーストリヒトでの再洗礼派の活動については以下を参照。Habets, pp. 98-162; A. F. Mellink, *De Wederdopers in de noordelijke Nederlanden 1531-1544*, Groningen, 1953, pp. 295-311.

<sup>106</sup> マティス・シュパンゲメッカー Mathys Spangemecker 他の証言による。Habets, pp. 144f. この小著は、ミュンスター再洗礼派の指導的神学者ベルンハルト・ロートマンが執筆した『復讐についての知らせ』である。ロートマンはこの小著で、市外の再洗礼派たちに、武器を持ってミュンスターに向かい、背神の徒と戦うよう呼びかけていた。マーストリヒトにおける『復讐についての知らせ』については以下も参照。Habets, pp. 231-235. この小著の低地ドイツ語本文は以下に収められている。Robert Stupperich (Hg.), *Die Schriften der Münsterischen Täufer und ihrer Gegner. 1. Teil. Die Schriften Bernhard Rothmanns*, Münster 1970, S. 284-297. 倉塚平による日本語訳は以下を参照。倉塚平、田中真造他編訳『宗教改革急進派 ラディカル・リフォーメーションの思想と行動』ヨルダン社、1972年、343-385頁；出村彰、森田安一、倉塚平、矢口以文訳『宗教改革著作集 第8巻再洗礼派』教文館、1992年、249-270、426-428頁。

<sup>107</sup> Redlich, S. 858; Bax. p. 55.

<sup>108</sup> ギスベルトが、メノーの支持者ギーリス・フォン・アーヘン Gielis von Aachen と同一人物かについては、専

## おわりに

最後に、ギスベルトを中心とした草の根の宣教について明らかになったことを、宣教者とその効果、宣教方法、人間関係、コミュニケーションの地理的範囲の四点に整理して確認する。

一点目だが、先ずはギスベルトに対する宣教については以下のことが明らかになった。宣教を行ったのは、1530年代はじめには、クロプリス、フィンネ、スラハトスカープという下ライン地方の説教師たちであった。彼らは皆、下ライン地方から低地地方の出身で、ユーリヒ公領西部を中心にさまざまな場所で宣教を行っていた福音派である。彼らはギスベルトに対し、聖職者妻帯を勧め、おそらく両種による聖餐、そして聖餐式のキリストの身体と血がが象徴であることを説いた。ギスベルトは彼らの影響で福音主義を支持するようになり、カトリックの聖職者としての地位を捨て、結婚したため、彼らの影響は大きかったことが分かる。ただし、ギスベルトは、聖職者妻帯と両種による聖餐については受け入れたが、象徴主義的な聖餐論には否定的であり、聖餐をめぐる考え方の違いでスラハトスカープとは争っていた。そのため、説教師の言うことをそのまま鵜呑みにしていたわけではなかったことが分かる。

1534年2月には、ヤーコブ・フォン・オッセンブルクとペーター・ファン・ドレメンというミュンスター再洗礼派の使者から宣教を受けた。ギスベルトは、彼らがミュンスターにおける奇跡と神の罰が迫っていることを聞いて、新しいエルサレムたるミュンスターに行くことを決意したため、この宣教の影響も大きかったと評価できる。ただし、ギスベルトは、信仰洗礼の必要は信じず、受けておらず、ミュンスター再洗礼派の主要な教えについては知らないし、14日で帰ってくるつもりだったと証言していた。これが、彼が再洗礼派として罰されることを避けるための偽証だったという可能性は否定できないが、ヤーコブの証言を考えても、この時までには再洗礼を受けていなかったことは確実であり、ミュンスター再洗礼派の教えを十分知っていた、全面的に受け入れていたとは考えにくい。

ギスベルトが、明確に再洗礼派に与するようになったのは、釈放されてからマーストリヒトに滞在した時期である。ギスベルトが、誰の影響を受けて再洗礼派になったのかは不明だが、マーストリヒト再洗礼派の指導者であったヘンリク・ロールか、ロールの死後指導的な立場にあったヤン・スメイトヘンである可能性が高い。

以上のように、ギスベルトは、下ライン地方の説教師たちから宣教を受け福音派となり、ミュンスターから派遣された使者によってミュンスター再洗礼派とのつながりができ、その後再洗礼派になったことになる。その意味で、彼は、説教師や使者から大きな影響を受けたと言えるが、他方では、一貫して彼らのいうことをそのまま受け入れてはいなかった。他の者から説かれたことのう

---

門家の意見も一致していない。レートリッヒはこれを強く疑っており、ニーポートは明確に別人物だとしている。Redlich, S. 854, A. 1; Niepoth. それに対し、レンベルト、ボックスは同一人物だと見なし、メリンクはほぼ間違いなく同一人物としている。Rembert, S. 340; Bax, p. 55; Mellink, p. 418. 今のところ筆者はこの問題について十分な検証を行う準備ができていないため、ここでは結論を保留しておく。

ち、自らが正しいと思う要素を取捨選択しながら、自らの信仰を変えていったと言える。

他方、ギスベルトが行った宣教の対象は、ヘーンゲンでは自分の司牧すべき一般信徒であった。ラートハイムでも、結婚式を行っていたので、周辺の福音派とつながりがあり、宣教をしていたのかもしれない。彼が司牧する宮殿の持ち主オルミッセン家の人々にも、福音主義を説いていたであろう。ヤーコブから宣教を受けた後は、その内容を周囲の福音派、そしてムルストロー親子に伝えていた。おそらく、自分の妻ゲルトルートにも話していたであろう。ギスベルトの宣教の効果は、証言からははっきり分からない。しかし、かつて司牧していたヘーンゲンの福音派が、追放中の彼に対する支援を最低限しか行わなかったことを考慮すれば、福音主義を受け入れる際にギスベルトの影響を受けたとしても、ギスベルトの熱心な支持者ではなかったことになる。ムルストロー親子や妻への働きかけは上手くいっておらず、ギスベルトの宣教の影響は限られたものだったと判断できる。彼は聖職者であっても、クロプリスたちのような、地域の宣教の中心人物というわけではなかったのであろう。

二点目の宣教方法だが、ギスベルトが受けた宣教は、審問記録から判明した限りでは、口頭で行われたものであった。審問記録からは、スラハトスカープ、オッセンブルク、ドレメンは、彼の家にやって来て宣教を行ったことが分かる。おそらく、クロプリスとフィンネも、彼の家で福音主義について説いていたのであろう。また、ギスベルトは、ヴァッセンベルクのクロプリスの家で結婚式を挙げていたが、それ以外の時にもクロプリスのところに赴いて、話をしていた可能性は高い。マーストリヒトでも彼は再洗礼派の家で行われた集会に参加していた。いずれにせよ、ギスベルトが受けた宣教は、自身や説教師、福音派信徒の家という日常空間で、口頭で行われたものであった。少なくとも審問記録からは、彼がルターやツヴィングリなどの改革者の著作やこの時期盛んに出版された福音主義的なパンフレットやビラを読んでいたことは確認できない。読んでいた可能性はあるが、もしそうだとすると、ギスベルト自身の認識では、クロプリスとフィンネによる口頭での宣教が彼が福音派になった契機であり、書物ではなかったことは明確である。もし文字による宣教を受けたとすると、ミュンスターへ行ったクロプリスと交わっていたであろう手紙は、ギスベルトに影響を与えていたのかもしれない。いずれにせよ、ギスベルトは、聖職者ではあったが、ほぼ口頭による宣教を受けていたことになる。

ギスベルトは、自ら著作を書くことはなかったため、目の前にいる相手に口頭で福音主義を説いていたのであろう。手紙を通じた宣教も行っていたのかもしれないが、証言には出てこないため検証不能である。

三点目の人間関係についてだが、ギスベルトが最も強い影響を受けたクロプリスたちは、ユーリヒ公領西部を中心に各地で宣教を行っていた説教師であった。彼らはこの地域の福音派宣教の中心人物たちであり、ギスベルトは、彼らと知り合うことで自らも福音派となった。それによってギスベルトは、下ライン地方の多くの福音派とつながるようになったと思われる。ギスベルトに宮殿つき司祭職を与えたムルストロー親子、ラートハイムを追放された後に一時的な滞在地を提供した各

地の貴族や福音派住民は、福音派であるが故にギスベルトを支援していたと考えられる。福音派であることそのものが、地域の福音派とつながる重要な契機になり、彼らが相互に支援を行っていたことが伺える。ただし、その支援は限定的なものであった。ムルストロー親子はユーリヒ公の命令に従い一度はギスベルトを追放したし、ギスベルトを泊めた者も、ユーリヒ公の命令に違反することを恐れてのことであろう、短い間しかそれを許さなかった。ギスベルトから多大な影響を受けたと思われるヘンゲンの福音派ですら同様であった。そのため、個々の福音派が、自らの取れるリスクの範囲を考えながら、ギスベルトをどの程度支援するかを決めていたのだと思われる。

ギスベルトの福音派としての活動にとって、家族・親族関係は無意味なものではなかった。ギスベルトが妻ゲルトルートと結婚したのは、彼が福音派になったためであった。それによってできた妻の兄弟ヨハンとの関係は、彼がラートハイムにいられなくなった際にマーストリヒトで避難所を見つけることを容易にしたと思われる。ただし、妻は、説教師やギスベルトから福音主義を説かれたであろうにもかかわらず、ミサにも行き、ギスベルトのミュンスター行きを止めようとしていた。この時期夫婦・親族が相互に影響し合っただけで福音派になることはよく見られるが、ギスベルトとゲルトルートは、それぞれ自身の信仰を保ち、相手に合わせることはなかった。

ギスベルトは、ミュンスターからの使者ヤーコブとペーターとは、元々面識がなかったと思われる。しかし、彼らがギスベルトのところに来たのは、ほぼ確実にクロプリスの指示があったためであった。クロプリスはユーリヒ公領からミュンスターへ移住したが、かつてのつながりを利用して宣教を行っていたことになる。ギスベルトは、ヤーコブから聞いた話を、地域の福音派、ムルストロー親子やおそらく妻といった身近な者たちに伝えていた。ギスベルトの働きかけが、ミュンスターへの同行者を増やしたかどうかは史料からは分からなかったが、ギスベルトが、既存の人間関係を利用して、身近な人びとへの宣教を行っていたことは確実である。

四点目の、地理的範囲毎の宣教について見て行く。ローカルレベル、つまりギスベルトが住んでいたヘンゲンやラートハイムは、彼が主に宣教活動をしていた範囲であった。ヘンゲンでは教区の信徒たちに、ラートハイムでは、ムルストロー一家など宮殿の人びとに福音主義に基づく教えを説いていたはずである。また、彼が住むラートハイムの人びとと個人的につながっていたのであろう、結婚式を挙げることもあった。反対にギスベルト自身は、ローカルなレベルでは福音主義の宣教を受けてはいなかった。彼のような聖職者は、教えを説く立場だったためである。

地域レベル、つまり下ライン地方や低地地方南東部は、ギスベルトが、教えを受ける際、彼が福音派として活動する際に、最も重要な意味を持っていた。彼が最も強い影響を受けたのは、下ライン地方を巡回していた説教師のクロプリスたち、そしてミュンスターからの使者ヤーコブたちであった。ギスベルトは、この地域の聖職者のところで聖体拝領をしていたし、追放時には各地の福音派の領主、修道女、親族、一般信徒といったさまざまな者たちから支援を受けていた。彼は、追放などの理由で様々な場所に移動していたが、この地域の外に出た形跡は見られない。ギスベルトの福音派としての活動は、ローカルなレベルを基盤としつつ、地域に広がっていた様々な福音派と

のつながりによって進められたものであった。

超地域レベルでは、ミュンスター再洗礼派とのつながりがはっきりと見られた。ギスベルトが、ミュンスター再洗礼派から受けた宣教は、直接的にはミュンスターから派遣されたヤーコブとペーターによるものであった。さらに、ヤーコブたちは、ミュンスターにいるクロプリスに派遣されていた。クロプリスもまた、下ライン地方で活動し、ミュンスターへ移動した者であった。クロプリスが地域で培った人間関係を利用し、ギスベルトのようなこの地域の福音派へ向けて使者を送ったこと、そしてマーストリヒトにミュンスター再洗礼派のメッセージと小著を伝えたのも、アムステルダムからやって来た女性だったことから、移動する者が地域を越えてメッセージを伝え、人を動かす原動力になっていたことが分かる。

ギスベルトを中心とした宣教を検証する通じて明らかになってきたのは、この地域に張りめぐらされていた福音派同士のゆるやかな宣教や支援のネットワークが、福音主義の伝播において果たした役割の大きさである。宗派形成が進んでいないこの時期の下ライン地方では、福音主義者の中でも考えの違いが様々にあった。ギスベルトも、他の福音派たちも、説かれたことをそのまま受け入れるのではなく、自ら考え、取捨選択し、自分の信仰を形作っていた。もちろん、ギスベルトの妻のように、教えを受けても、カトリックの信仰を保つ者もいた。また、こうした個々の福音派の考え方の違いが、ギスベルトとスラハトスカープのあいだで起こったように仲違いを引き起こすこともあった一方、ギスベルトとクロプリスのように協力関係が続くこともあった。下ライン地方各地に散在していた福音派たちは、信仰に違いがある者も含め、ゆるやかにつながっていた。そして、個々の福音派が自分のできる範囲で福音主義を伝え、新たに福音派となった者が、このつながりに加わることで、彼らの作る地域での福音派ネットワークは密度を増した。そして、時には移動する福音派との出会いが、遠く離れた場所の福音派とのつながりを作り出した。そして、そのつながりの中では、個々の福音派が、自らの取れるリスクや熱意の範囲内で、他の福音派を支援することがあった。ギスベルトは聖職者ではあったが、彼の宣教活動はそれほど活発でもなく、大きな成功を取めたようにも思われぬ。しかし、彼のような者たちが、自らの住む場所で、あるいは地域のあちこちで口頭で行った地道な宣教活動が積み重なり、つながりの密度と広がりを発展させ、彼らが相互にゆるやかに支援し合うことではじめて、福音主義は地域の中で広がり、地域の福音派は活動を保つことができたのであった。

謝辞：本研究はJSPS科研費 JP21K00941の助成を受けたものである。